

報告論文要旨

大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程 1 年 工藤健太

本論文では、日本銀行の非伝統的金融政策が資産市場の信用コストの一種で、長期金利とその期間の予想短期金利の平均値との差である期間プレミアムに与える影響について実証分析を行った。短期金利のゼロ金利制約の中、日本銀行はさらなる金融緩和効果を市場に与えるために、国債の買い入れをはじめとする大規模資産買い入れを実施している。こうした政策により、各資産のイールドカーブを押し下げ、期間プレミアムをはじめとした信用コストの低下を促すイールドカーブ効果が生じると考えられている。本研究では、非伝統的金融政策がこうしたイールドカーブ効果を生み出していたのかについて、Gertler and Karadi(2015)を参考に操作変数を用いた構造 VAR モデルによる分析を行った。実証分析の結果、金融政策の引き締めショックにより期間プレミアムのインパルス応答は正の反応を示しており、なおかつ分析対象となる国債の満期が長いほど応答は大きくなった。よって、非伝統的金融政策が期間プレミアムを圧縮し、その政策効果は満期が長くなるほど大きくなること示されたと考えられる。つまり、本論文は非伝統的金融政策によってイールドカーブ効果が生じたことを明らかにしている。